

80年前の目撃者の証言

— 高田博厚著「ロマン・ロラン」(1936) —

高 橋 純

彫刻家高田博厚はロマン・ロランに宛てた1936年8月16日付けの手紙である雑誌への寄稿を依頼して次のように書いている¹。

14 Cité Falguière, Paris (15^e)

Le 16, Août, 1936

Mon cher Romain Rolland

Une revue musicale au Japon, “Critique musicale (Ongaku Ken Kiu)” m’a communiqué qu’elle va publier au mois de Septembre le numéro spécial en vue de vous rendre hommage. Et elle me demande de vous prier d’avoir l’amabilité de lui envoyer quelques mots de message. J’ignore si vous êtes en ce moment à Villeneuve, mais étant assez pressé, je vous y écris. Il me serait bien agréable si vous pourriez distraire quelques instants pour cette revue, et si vous vouliez envoyer votre message à Katayama, celui qui aussi a dû écrire à ce sujet. Dans ce numéro, Katayama, Takamura et moi, nous écrirons particulièrement les articles sur vous et malgré la surveillance actuelle du Japon où il est presque impossible d’y présenter votre vraie figure, moi qui vois toujours l’unité de l’âme musicale et de l’action en vous, ne veux point manquer de le faire, bien que cette revue me demande

¹ これ以降に示されるフランス語の文章は、明白な書き間違いを除きできる限り原文のままの形で引用する。

d'écrire sur vous comme critique de la musique. Je vous ai suivi fidèlement, avec tant de questions, depuis mon enfance, et lorsque je constate que les éléments s'unissent inséparablement en votre grande existence, bien que contradictoire paraît-il, je vous ai compris et je vous comprendrai. En vous écrivant cette lettre, j'entend sous le ciel d'été, la *Symphonie Pastorale* qui vient de la radio du voisin. Je pense à *Lui* et je pense à vous.

Bien cordialement à vous

Hiroatsu Takata²

高田の依頼が受け入れられ、本当にロマン・ロランからの寄稿が実現したのか否か事実を確認すべく当該雑誌³を紐解いてみると、大作 *Jean Christophe* 最終巻 (La Nouvelle Journée) の序章となる 2 ページ分の邦訳 (片山敏彦訳) を「音楽への頌歌」と題して巻頭に掲げているが、いずれにして

² (本文邦訳)「日本の音楽雑誌『音楽研究』が、あなたを讃える特集号を9月に出す旨私に伝えてきました。そしてあなたから一言読者へのメッセージを送ってくださるようお願いしてほしいと頼まれました。私は今あなたがヴィルヌーヴにおられるか知らないのですが、いささか急ぎの用件なので、ともかくそこ宛てに書いています。私としては、この雑誌を相手にあなたが少しばかり気晴らしができれば良いと思っていますし、また、この件できっとあなたに手紙を寄こすはずの片山にあなたから声をかけていただける良い機会だと思っています。この特集号では、片山と高村と私が各自あなたについて執筆します。現今の日本の思想統制の状況下ではあなたの真の人物像を紹介することなどほとんど不可能なので、編集部は私に、あなたを音楽批評家として紹介するように言ってくるのですが、あなたにあっては音楽の心と行動とが一体のものであることを理解している私としては、やはりあなたの真実の姿を是非とも描きたいと思っています。私は子供の時から、数多の疑問を抱きつつ、あなたの言葉を忠実に追ってきこころに至り、思想を形作るすべての要素が、いかに矛盾しているように見えようと、あなたという偉大な実存の裡では不可分に一体化しているのだと確信した今、私にはあなたのことが理解できたのであり、これからも私はあなたを理解していくでしょう。(以下略)」

³ 『音楽研究』第2巻第1号、昭和11年9月20日印刷(1936/09/20)、昭和11年10月1日発行(1937/10/01)、(発行所)共益商社書店

も、高田の記事も含めこの号のためにフランスから寄稿されたと思しいものは掲載されていない。また発見された限りでの「ロラン—高田往復書簡」を見ても、その後この件に触れた記述は見られないことから、結局この雑誌の「ロマン・ロラン特集号」は刊行はされたのだが、ロマン・ロランの記事も高田の記事も書かれることはなかったのだらうと推測されたのだった。

しかしその後フランス人のクリスチャン・セネシャル (Christian Sénéchal, 1866-1938) 研究者 Claudine Delphis が次のような書簡を発見した⁴。ロマン・ロランについての著書もあるセネシャルは高田がフランスに渡った時には存命で、そのセネシャルに宛てて高田はこのような依頼状を送っていたのだった。

Le 16 août 1936

14 cité Falguière (15^e)

Mon cher Sénéchal,

Une revue musicale au Japon, *Critique musicale* (Ongakou-Kenkiu) qui va publier au mois de septembre le numéro spécial consacré à Romain Rolland, vient de me charger de trouver quelque critique français qui puisse bien vouloir écrire sur R. Rolland, comme critique de la musique. Étant assez pressé, je n'ai pas le temps de m'en occuper, et d'ailleurs comme presque tout le monde est absent en ce moment de Paris, je ne trouve personne qui puisse le faire.

J'ai pensé à vous et votre livre « Romain Roland »⁵ et je n'ai pas hésité, en traduisant une partie du vôtre, « le poète musicien », à l'envoyer au

⁴ 女史による書簡発見を筆者が知ったのは、同僚研究者 Roland Roudil からの情報提供依頼があった2017年5月1日だった。

⁵ Christian Sénéchal, *Romain Rolland*, éd. La Caravelle, 1933. « le poète musicien » 当該書のうちの1章である (p. 34-42)。

Japon, pour qu'elle y arrive avant la fin du mois. Vous m'excuserez de l'avoir fait, sans avoir votre permission, en pensant que ce sera le plaisir commun de nous servir en l'honneur de notre ami. Dans ce numéro, nous, Katayama, Takamura et moi, écrirons particulièrement les articles sur lui.

Bien cordialement à vous

Hiroatsu Takata⁶

この手紙からは、高田自らがロマン・ロランについて記事を書こうとしているのみならずセネシャルのロマン・ロラン論の一部を邦訳して日本の読者に紹介したいとする意欲が明らかである。ならば当該雑誌の「ロマン・ロラン特集号」にはなぜそれらの記事や翻訳が掲載されなかったのか。改めてこの雑誌くまなく読み直してみると、「編集室から」と題されたその編集後記に、ささやかで目立たないが驚くべき次の一節が記されていた。

「ロラン氏が旅行中のため本号に氏自身の原稿をいただけなかったのは全く遺憾であった。同様に残念なのはパリの高田博厚氏の原稿がメ切に間に合わなかったことである。」(p. 150)

このことからわかるのは、高田の記事は確かに掲載予定がされていたとい

⁶ (本文邦訳)「日本の音楽雑誌「音楽研究」が9月にロマン・ロラン特集号を出すことになり、そこで私に、音楽批評家としてロマン・ロランについて執筆してくれるフランス人批評家を探してほしいと頼んできました。私は現在多忙を極め、またこの時期パリには人がいないこともあって、そのような人物が見つかりません。そこで私はあなたとあなたの著書『ロマン・ロラン』を思い出し、さっそくその中の「詩人音楽家」を翻訳して月末までには日本に送ろうと決めました。あなたの承諾なしに決めてしまったことはお詫びしなければなりません、われらの友[ロマン・ロラン]の榮譽のために尽くすことになるなら私たちがいずれにとっても喜ばしいことではないかと思っています。この特集号には、私たちつまり片山も高村も私もそれぞれ彼について書くことになっています。」

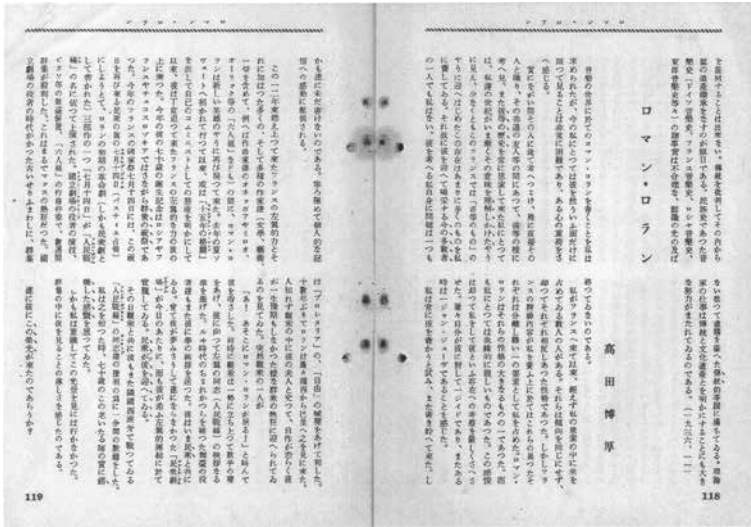
うことである。高田のロマン・ロランあての手紙の日付が8月15日付け、クリスチャン・セネシャル宛てのものが8月16日付けとなっており、「特集号」の印刷が9月20日であれば、寄稿の依頼から本の印刷までが1月そこそこであったのだから、当時の郵便事情からして、ましてフランスからの郵送が船便であったのならば、原稿の到着が遅れても不思議ではないだろう。そこで、「ロマン・ロラン特集号」には間に合わなかったとしても事実記事は書かれ、日本に向けて発送されたのであるかもしれない。単純な推理ではあるが、もしも原稿1枚に遅れて編集部に到着したのであれば、同誌の後続の号に掲載されることになるという可能性も否定できない。そこでまずはこの「ロマン・ロラン特集号」の直後の『音楽研究』⁷に当たってみる。するとこの号は「邦楽研究第二特集」と名打たれているにも拘わらず、その目次には「ロマン・ロラン」と題された記事があり、その筆者は高田博厚なのであった。

A117085

著者	頁	著者	頁
ロマン・ロランと管楽と管楽を中心として	99	高田博厚	99
ロマン・ロランの音楽的個性	110	高田博厚	110
ロマン・ロランの音楽的個性(2)	111	高田博厚	111
ロマン・ロランの音楽的個性(3)	112	高田博厚	112
ロマン・ロランの音楽的個性(4)	113	高田博厚	113
ロマン・ロランの音楽的個性(5)	114	高田博厚	114
ロマン・ロランの音楽的個性(6)	115	高田博厚	115
ロマン・ロランの音楽的個性(7)	116	高田博厚	116
ロマン・ロランの音楽的個性(8)	117	高田博厚	117
ロマン・ロランの音楽的個性(9)	118	高田博厚	118
ロマン・ロランの音楽的個性(10)	119	高田博厚	119
ロマン・ロランの音楽的個性(11)	120	高田博厚	120
ロマン・ロランの音楽的個性(12)	121	高田博厚	121
ロマン・ロランの音楽的個性(13)	122	高田博厚	122
ロマン・ロランの音楽的個性(14)	123	高田博厚	123
ロマン・ロランの音楽的個性(15)	124	高田博厚	124
ロマン・ロランの音楽的個性(16)	125	高田博厚	125
ロマン・ロランの音楽的個性(17)	126	高田博厚	126
ロマン・ロランの音楽的個性(18)	127	高田博厚	127
ロマン・ロランの音楽的個性(19)	128	高田博厚	128
ロマン・ロランの音楽的個性(20)	129	高田博厚	129
ロマン・ロランの音楽的個性(21)	130	高田博厚	130
ロマン・ロランの音楽的個性(22)	131	高田博厚	131
ロマン・ロランの音楽的個性(23)	132	高田博厚	132
ロマン・ロランの音楽的個性(24)	133	高田博厚	133
ロマン・ロランの音楽的個性(25)	134	高田博厚	134
ロマン・ロランの音楽的個性(26)	135	高田博厚	135
ロマン・ロランの音楽的個性(27)	136	高田博厚	136
ロマン・ロランの音楽的個性(28)	137	高田博厚	137
ロマン・ロランの音楽的個性(29)	138	高田博厚	138
ロマン・ロランの音楽的個性(30)	139	高田博厚	139
ロマン・ロランの音楽的個性(31)	140	高田博厚	140
ロマン・ロランの音楽的個性(32)	141	高田博厚	141
ロマン・ロランの音楽的個性(33)	142	高田博厚	142
ロマン・ロランの音楽的個性(34)	143	高田博厚	143
ロマン・ロランの音楽的個性(35)	144	高田博厚	144
ロマン・ロランの音楽的個性(36)	145	高田博厚	145
ロマン・ロランの音楽的個性(37)	146	高田博厚	146
ロマン・ロランの音楽的個性(38)	147	高田博厚	147
ロマン・ロランの音楽的個性(39)	148	高田博厚	148
ロマン・ロランの音楽的個性(40)	149	高田博厚	149
ロマン・ロランの音楽的個性(41)	150	高田博厚	150
ロマン・ロランの音楽的個性(42)	151	高田博厚	151
ロマン・ロランの音楽的個性(43)	152	高田博厚	152
ロマン・ロランの音楽的個性(44)	153	高田博厚	153
ロマン・ロランの音楽的個性(45)	154	高田博厚	154
ロマン・ロランの音楽的個性(46)	155	高田博厚	155
ロマン・ロランの音楽的個性(47)	156	高田博厚	156
ロマン・ロランの音楽的個性(48)	157	高田博厚	157
ロマン・ロランの音楽的個性(49)	158	高田博厚	158
ロマン・ロランの音楽的個性(50)	159	高田博厚	159
ロマン・ロランの音楽的個性(51)	160	高田博厚	160
ロマン・ロランの音楽的個性(52)	161	高田博厚	161
ロマン・ロランの音楽的個性(53)	162	高田博厚	162
ロマン・ロランの音楽的個性(54)	163	高田博厚	163
ロマン・ロランの音楽的個性(55)	164	高田博厚	164
ロマン・ロランの音楽的個性(56)	165	高田博厚	165
ロマン・ロランの音楽的個性(57)	166	高田博厚	166
ロマン・ロランの音楽的個性(58)	167	高田博厚	167
ロマン・ロランの音楽的個性(59)	168	高田博厚	168
ロマン・ロランの音楽的個性(60)	169	高田博厚	169
ロマン・ロランの音楽的個性(61)	170	高田博厚	170
ロマン・ロランの音楽的個性(62)	171	高田博厚	171
ロマン・ロランの音楽的個性(63)	172	高田博厚	172
ロマン・ロランの音楽的個性(64)	173	高田博厚	173
ロマン・ロランの音楽的個性(65)	174	高田博厚	174
ロマン・ロランの音楽的個性(66)	175	高田博厚	175
ロマン・ロランの音楽的個性(67)	176	高田博厚	176
ロマン・ロランの音楽的個性(68)	177	高田博厚	177
ロマン・ロランの音楽的個性(69)	178	高田博厚	178
ロマン・ロランの音楽的個性(70)	179	高田博厚	179
ロマン・ロランの音楽的個性(71)	180	高田博厚	180
ロマン・ロランの音楽的個性(72)	181	高田博厚	181
ロマン・ロランの音楽的個性(73)	182	高田博厚	182
ロマン・ロランの音楽的個性(74)	183	高田博厚	183
ロマン・ロランの音楽的個性(75)	184	高田博厚	184
ロマン・ロランの音楽的個性(76)	185	高田博厚	185
ロマン・ロランの音楽的個性(77)	186	高田博厚	186
ロマン・ロランの音楽的個性(78)	187	高田博厚	187
ロマン・ロランの音楽的個性(79)	188	高田博厚	188
ロマン・ロランの音楽的個性(80)	189	高田博厚	189
ロマン・ロランの音楽的個性(81)	190	高田博厚	190
ロマン・ロランの音楽的個性(82)	191	高田博厚	191
ロマン・ロランの音楽的個性(83)	192	高田博厚	192
ロマン・ロランの音楽的個性(84)	193	高田博厚	193
ロマン・ロランの音楽的個性(85)	194	高田博厚	194
ロマン・ロランの音楽的個性(86)	195	高田博厚	195
ロマン・ロランの音楽的個性(87)	196	高田博厚	196
ロマン・ロランの音楽的個性(88)	197	高田博厚	197
ロマン・ロランの音楽的個性(89)	198	高田博厚	198
ロマン・ロランの音楽的個性(90)	199	高田博厚	199
ロマン・ロランの音楽的個性(91)	200	高田博厚	200
ロマン・ロランの音楽的個性(92)	201	高田博厚	201
ロマン・ロランの音楽的個性(93)	202	高田博厚	202
ロマン・ロランの音楽的個性(94)	203	高田博厚	203
ロマン・ロランの音楽的個性(95)	204	高田博厚	204
ロマン・ロランの音楽的個性(96)	205	高田博厚	205
ロマン・ロランの音楽的個性(97)	206	高田博厚	206
ロマン・ロランの音楽的個性(98)	207	高田博厚	207
ロマン・ロランの音楽的個性(99)	208	高田博厚	208
ロマン・ロランの音楽的個性(100)	209	高田博厚	209

『音楽研究』第二巻第一號目次

⁷ 『音楽研究』第2巻第2號，昭和11年12月15日印刷（1936/12/15），昭和12年1月1日發行（1937/01/01），（發行所）共益商社書店



『音楽研究』第二巻第一號、高田博厚著「ロマン・ロラン」冒頭ページ

この重要なエッセーが当該雑誌当該号（邦楽研究第二特集）に掲載されるに至ったのは、同誌前号（ロマン・ロラン記念號）の印刷段階で高田の原稿が未着であったため、編集部判断で本号に回されたのであろうと理解される。そのためにこのエッセーは、筆者高橋が約80年後の2017年に発見するまでその存在は完全に忘却されていたのだった。（高田の文章を網羅したはずの『高田博厚著作集』全4巻（朝日新聞出版社、1985年）にも採録されていないことから、著作集の編集者もその存在に気付かなかったことは明らかである。）

以下にそのエッセーを高田博厚研究のために貴重な歴史的資料として紹介する。高田はロマン・ロランについて回想のかたちで複数の文章をものしているが、ここに見られるのは、ロマン・ロランと直接交流を持つことのできた高田博厚の、フランスのみならずヨーロッパ全体の波乱に満ちた1930年代半ばの、いわばリアルタイムの目撃証言となっていることが確認されるはずである。ナチスドイツ政権出現、フランス人民戦線政府成立、スペイン内戦

勃発といった危機と変革が相次ぐ激動のヨーロッパの現実の中に生きざるを得なかった一つの優れた知性（ロマン・ロラン）についての思索と観察の報告である。⁸

「ロマン・ロラン」

高田 博厚

音楽の世界に於いてのロマン・ロランを書くことを私は求められたが、今の私にとっては彼を然ういふ面だけに限って見ることは非常に困難であり、ある心の重荷をさへ感じる。實にながい間その人に就いて考えつゞけ、殊に直接その人と識り、その共通の友人等の間にあって、彼らのように考え見、また彼等の歴史を常に思索してきた私にとっては、私達の世紀がいま漸くその意味を理解しかけたように見え、少なくともこのフランスでは「吾等のもの」のように迎へはじめたこの存在はあまりに多くのものを私に齎してゐる。それ故に彼を迎へて喝采する今の多数者の一人でも私はない。彼を考える私自身に問題は一つも終わっていないのである。

私がフランスに来て以来、絶えず私の思索の中に坐を占めている数人の人がある。それらは傾向を同じにせず、却ってそれぞれ相反しあつた性格であつた。しかしフランスの精神内容が私を養ふ上に於いてこれらの異なつたそれぞれは分離し難い一の要素として私を占めた。ロマン・ロランはそれらの性格の大きなものの一であつた。而も私にとっては血縁的に親しいものであつた。この感情は却って私をして彼という存在への考察を厳しくさえさせ

⁸ 以降高田の文章表記に関して、漢字については新字体に改めたものが多い。送り仮名については原文を尊重しているが、旧字体の平仮名は現行の字体に改めたものもある。

た。屢々自分が彼に対して一ジイドであり、またある時は一ジャン・ジュエであることを感じた。

私は常に彼を書こうと試み、また書き貯えてきた。しかも遂に未だ書けないのである。寧ろきわめて個人的な記憶への感動に圧倒されている。

この一二年来燃え上って来たフランスの左翼的力とそれに加わった多くの、そして多種の作家達（文学、芸術、一切を含めて。例えば作曲家達のオネッガアやミロオ、オーリック等の「六人組」なども）の間に、ロマン・ロランは新しい英雄のやうに再び戻って来た。去年の夏ソヴェートへ招かれて行って以来、或いは「十五年の闘争」を出して自己のコミュニストとしての態度を明らかにして以来、彼は丁度迫って来たフランスの左翼的な力の波の上に乗った。今年の彼の七十歳の誕生記念はロシアやフランスやチェコスロヴァキアではさながら群衆の祝祭であった。今年のフランスの国家祭七月十四日には、この祝日を再び来る民衆の真の七月十四日（バスティユ占領）にしようとして、ロランの初期の革命劇（しかも民衆劇として書かれた）三部作の一つ「七月十四日」が「人民戦線」の名に依って上演された。国立劇場の役者の演技、ピカソ等の舞台装置、「六人組」の作曲演奏で、数週間群衆が殺到した。これはまるでマッスの熱狂だった。国立劇場の役者の時代がかった古いせりふまわしに、群衆は「プロレタリア」の、「自由」の喊声をあげて和した。十数年ぶりでロランは遙々瑞西から巴里へ之を見に来た。人知れず観衆の中に彼の夫人と交わって、自作がおそらく彼が一生豫期もしなかった様な熱狂に迎えられているのを見ていた。突然観衆の一人が〔ママ〕

「あ！あそこにロマン・ロランが居る！」と叫んで彼を指さした。同時に観衆は一勢に立ち上がって歓呼の声をあげ、彼に向って左翼の同志（人民戦線）の挨拶なる拳を挙げた。ルイ時代のちぢれたかつらを被った舞台の役者達もまた彼に拳の挨拶を送った。彼はいま民衆と共にいる。嘗て彼が夢みそうして遂にならなかった「民衆劇場」が今日のあたりに、而も彼が希ふ左翼的団結に於いて実現している。民衆が彼を迎えている。

その日観衆と共に彼もまた隣国西班牙で戦っている^{フレンテ・ポブラール}「人民戦線」の^{カマラド}同志の捷利の為に一分間の黙祷をした。

私は之を知った時、七十歳のこの老いたる師の実に錯雑した感慨を思っていた。

しかも私は意識してこの光景を見には行かなかった。群衆の中に彼を見ることの淋しさを感じたのである。

遂に彼にこの栄光が来たのであろうか？

この民衆の熱狂の上にあげられる前に、彼は最後の三部戯曲「^{ジュ・ド・ラムール・エド・ラ・モール}愛と死との戯れ」「^{パーク・フルーリ}花の復活祭」「^{レオニード}獅子座の流星群」の中で、革命する民衆の力と、さういふ時代に先駆し、その時代を背負ふ大きい存在の運命を描いた。彼は其処に自ら自分の姿を感じたであろう。(私は彼と散歩した時、斯様の姿を彼に感じた一つの深い記憶を持っている。)彼が既に感じたこの悲劇を通して十数年の後の今日、彼に捷利が来たのであろうか？

「^{ロマン・ロラン・ヴィヴァン}生けるロマン・ロラン」を書いたジャン・ジューヴは何故ロランから離隔してしまったのであろうか？七年前はじめてロランに会ふ日の前夜、彼が住むヴィルヌーヴ村の宿の部屋から暗く静かなレマン湖を眺めながら、私はジューヴの感情を思っていた。シュテファン・ツヴァイクの文明批評家的見方をするにはもっと執念深く熱愛的にロランにせまっていたジューヴは何故その師と師の一切から去ったのか？

彼はいま神秘主義に入りカトリックの信条に没し、そうして^{ヘルダーリン}の世界にいる。

私がロランに会って最初に聞いたかったことは「彼の思想に於いて個人主義的立場と民衆と共に在ることとが會つて矛盾することなく在ったかにかかわらず、何故彼は Kommunismus を是認できないか」であった。(事実私は之を彼に云った)。彼はその頃大きな転換期にいた。しかし彼はまだ「個人主

義者」であった。

ロランが後輩として最も親愛し、大戦の折彼に「非戦論者」としての知識者の間でのみの呼びかけに終らず、マッセのために行動することをしようとしたフランスのプロレタリアとその文学の誠実な指導者であったかの「夜」や「呪われたる時」の作者マルセル・マルチネは、そのロランが今正統コミュニストとして民衆と共に在ると信じている絶頂に於いて、何故決定的な訣別をしてしまったのか？

私の心を常に打つ一つの思い出がある。瑞西でロランとガンヂが人を避けて一週間の会談をした時、私は幸運にもその会談への只一人の列席者であり得た。その時既にコミュニストとして暴力革命をも肯定していたロランと、印度独立の為にあくまで「無抵抗」^{ノン・レジスタンス}革命を棄てないガンヂとの対談は、トルストイに教化されたこの二つの大きな存在の「人道主義」的立場の微妙でまた激しい分岐点を示していた。

或日談話を終って先ずガンヂがロランの部屋を去った。ロランと彼の秘書（現夫人、マリー・クーダツェヴァ）と私が残っていた。長い部屋外套を肩にかけてロランは部屋の中を行き来していた。そうして一言二言クーダツェヴァ夫人と言葉を交わした。するとふいにロランが私の傍へ来て外のきらきら光る冬の陽を見ながら、独り言のように、[ママ]

「夢だ！ 夢だ！」とつぶやいた。夫人も私も黙って彼の顔を見た。

何がイリュージョンなのか？ ガンヂの運動方法が？ それとも一切が？ 信ずることが？

ロランと訣別して後の或日、病床にいたマルチネは痛切に胸を打つ言葉を私に云った。

「君、何時も少数者の間に自分を見出すことが心の喜びからだとは思ひたまふな。僕だって信じる彼等と共に自分を感じる事がどれ位好いかわか

らない。けれども若し信じるといふことが放棄することだったら、僕にはそれは出来ない！ 僕には出来ないのだ！」(Si croire, c'est abdiquer, alors je ne peux pas! Je ne peux pas!)

最近明確に Kommunismus に参加した現代の二つの大きな性格—相対立した二性格—が私達の時代の深い暗示と教訓を齎すことを無視してはいけない。(このアンドレ・ジイドとロマン・ロランの Kommunismus 参加を厳密に考えてみることは恐らく日本では不可能かもしれない。)

民衆はこれらの世紀の人が漸く Kommunismus の入り口にたどり着いた時喝采する(この歓迎は既にソヴェート・ロシアで充分にやった。さうしてフランスでは彼等が来た時運よくその入口は花輪で飾られていたのだ!) 私達は斯ういふ二つの性格が何故 Kommunists になったかその経路を考え抜く。彼等の中に於いての放棄と転換と、また敗北と進発と、さうして時代と民衆に於いての力の進展とその成算を考へる。

ジイドは Kommunists としての一年生に入った。さうして彼の旧き女友達 アンジュール(「パリュード」の中の女主人公)に自分が教わり会得しただけのものを書き送る。彼は「資本論」を読み始める。さうして暫く文学創作の断念を自ら云った。

ロランは私への手紙の一通で「…その矛盾の庄倒から離脱しようとするばこそ、芸術の世界で生き抜く。ミケランジェロはその最も大きな例であった。あらゆる熱情と苦悩はただ芸術創作にのみ注がれた。けれども私は君に云ふ。斯様の場合、私は芸術家ではないのだと」。彼から受けた多くの書簡の中でこの言葉程逼迫して私を打つものはなかった。

この二つの大きな存在が明かに Kommunismus 加担を示した時、多くの左翼に人々は如何にも之をよろこび、彼等に賛辞をあげせかけた。正しくこれは私達が世紀の最も大きな例を自分の味方として捷ち得たのであり、過去が私達の新しい時代に引きづけ込まれたかのやうである。ジイドの「自我」と「正

直]さには様々にブルジョワ意識の衣裳を被せられ得るものがあつたとする。ロランの「自由」と「正義」にはただ叡智と観念的感傷の世界だけのものであつたとする。嘗て忽忽人々はそれらの矛盾を指摘し非難した。あたかも斯様の矛盾が思索の体系の起点であるかの如くに。

さうして彼等が一步步を進めて Kommunismus に於いて民衆と共にある時、それらの矛盾が最早無くなってしまったかに云ふ。

彼等が民衆と共に在り、プロレタリアの自由と共にある事を歎ばない誰があらう。そこでの矛盾の有無は問題ではない。

「社会」と「個人」の矛盾が此処に在るのでもない。今のソヴェートに斯様の矛盾を指摘するのはむしろ誤りである。ジイドやロランの嘗ての「個人主義」的立場と今日の立場との間隔さえ問題にはなり得ない。

しかし彼等が民衆と共に在り、プロレタリアの自由の為に闘ふことが、それと同時に彼等の「理念」の為に闘ひであることを、さうしてそれが常に民衆の、或は社会の「未来」への願望と啓示として働くことを忘れてなるまい。しかし民衆、社会は直ちに未来へ飛躍しはしないのだ。

ジイドは「創作を断念」し、ロランは自ら「私は芸術家ではない」といふ。けれども遂に彼等の活動は此「叡智」の世界のみで果たされる。民衆は之を理解しはしない。

彼等は今民衆と共にある。これは彼等が唯物弁証法の代弁者としてでもなく、革命闘士の性格としてでもない。彼等が「理想主義家」だからである。そうして其処では自らの放棄にもかかわらず彼等の全存在と意識と感覚は「芸術世界」のそれである。最も素朴なる動機と形に於いて Kommunists である存在を私たちは忘れてはいけない。祖ヴェーとに於けるゴールキーがそれであった。ゲェノオヤラミューズの理念における懷疑と逡巡と理想主義とが素朴な（さうして最も本源的な）形に於いて民衆と一致しようとする要望は彼等にもある。

遂にまた彼等もその「孤独」に孤立する日があるのではないであろうか。

「民衆」と「理念」の一致の為に彼等は闘ふ。それが大いなる存在の運命である。しかし民衆は動く力である。彼等をさえ踏み越えて行く。

「其処に私は世の偉大な人々の秘密を会得した。偉大な敗北者達の。行動や思想での偉大な人達。十字架に架けられたもの。世紀から投げ棄てられ、また世紀を投げ棄てたもの。心砕け、また怒れるもの。さうして（その最も大きな敗北者は）一捷利して、ミケランジェロやワグネルのようにその捷利の虚無を見たもの。さうして放棄する。神に於いて放棄する。夜を通して天使と闘ってのちのヤコブの崇高な捷利。しかしこの捷利は闘争の果実としてのみしか與へられない。さうしてこれは危険な秘密である。秩序の言葉は之を口にしない。何故ならば民衆はこれに耐えないだろうから。」（ロマン・ロラン「マルヴィダ・フォン・マイゼンブークの想い出」）

音楽とは関係のない、而も連絡なきかに見える断片を此処まで書いて来たことを読者は容していただきたい。けれども私達は私達の世紀が持っているものとそれが與へている問題を理解しなければならない。如何様な定義が與へられ分析が行はれやうとも、ロマン・ロランはこの意味に於いて私達にとっての大きな英雄的なさうして悲劇的な存在である。何故なら私達の世紀が背負ふもの自身の中にこれ程含むでいる存在はないからである。然も尚問題は終わっていない。そうして彼が経て来た道と其処での言動は、それらの内容を経験しないが故にもっと賢く或はもっと自由にそれを観察し得る後から来た若い者達から忽忽笑はれた。トルストイが死後に受けた冷たい眼はロランをも見ようとする。

ワグネルとニイチェの時代に、またゾラとバレスの時代に誰が身を置いたのであろうか。ロランが若い頃マルヴィダ・フォン・マイゼンブークから受けた「理想主義」中にはワグネルやニイチェやマッツィイーニの大きな姿が未だまざまざと残っていた。彼はそれらの要素をうけついだ。さうして私達の世紀が其処から来ているのである。

おそらく多様の面と要素がロランの中に並立する。それらは少しも統一さ

れないかに見え、しかも最も大きな調和を生むでいると思はれる。それらの各方面をとりあげて彼を分析することは困難ではない。さうして今日まで彼はそのいづれかの面だけを買われていたのである。「歴史家」「音楽家」「理想主義者」「人道主義者」。一つの混沌が多種の光芒を發する時、人は忽忽それに眩惑され易い。彼は或者からは憧憬され、或者からは甘いと冷笑された。そのいづれでもある。さうしてロランにその責があるのではない。

「音楽家」としてのロランこそ最も買われたものであった。「昨日の音楽家」「今日の音楽家」「リリュリ及びスカラッティ以前のオペラ史」また「過去の国への音楽の旅」に示される正確で聡明な音楽論には何人も傾倒した。コレッジ・ド・フランスに於ける彼の音楽講座にはアンドレ・ジイドさえ聴きに出かけた。(ジイドとロランが一生互いに嫌ひ合っていたことを想起されよ。)しかし音楽家たちは之を迎えなかった。サン・サーンスとヴァンサン・ダンディは遂に彼に屈服しなかった。何に由来するかを考へて見られるが好い。

しかしフランス人にフーゴオ・ウォルフを、またフランス自身のものなるエクトル・ベルリオーズの精神を知らしめた恩は決して忘却出来ないであらう。何故であるか？

私はこの大きな存在を裁断することを嫌ふ。「音楽家としてのロラン」として何が語りそへ得よう。若し斯様の世界に於いてロランを理解しようと欲するならば、「ジャン・クリストフ」を知るのみである。寧ろ彼の音楽書ではない。

果して「ジャン・クリストフ」が小説であるか否かは忽忽論議された。これに所謂小説の描写はない。バルザックもゾラもまたフローベルの一端さへない。小説的なカテゴリーを求める者はこの書を読むに耐えないであろう。作者は其処で音楽精神を言葉で表現しようと欲したのである。(おそらく若い時音楽を放棄しなければならなかった彼には、言葉による音楽的表現の欲望があった。彼は楽詩楽劇的ものを書かうと望んでいた。「ジャン・クリストフ」の作品的構成に交響曲のムーヴマンをさえ彼は意識している)。ワグ

ネルが音楽の中に「言葉の世界」をも総合させようとしたやうに、ロマン・ロランは言葉によって「音楽の一世界」を建築しようとした。ここにこの世紀の二人の壮大な不思議な「理想主義者」の夢がある。ワグネルの音楽が甚だ観念的であるやうに、「ジャン・クリストフ」は龐大な観念の俯瞰図である。しかもそのところどころに最も真実である甘美な、悲哀な、人生的な音律がその深みからほとぼりしり出るのを注意されるが好い。私達に飲ばしき勇気を与えるところの精神が至るところにある。私達がこの書に負ふところのものは小説的描写の妙味ではなくして、この精神の術に於いてである。一つの魂が闘ひ、怒り、悲しみ、愛して遂に闘争の夜が明ける時の調和。常に其処には社会が在り、民衆への呼びかけと自己の願望がある。(そこで人は必ずベートオベンを聯想するであろう。) 実にベートオベンにアンスピレされた十九世紀の偉大な「理想主義」の二個の記念碑—ワグネルとロラン (彼等はその一生を通じてベートオベンを防衛した) —は民衆の前に倒れる。さうして民衆はその倒れた柱を花輪で飾る。

ゲーテはベートオベンを聴くに耐へなかつた。忽忽偉大な精神はそれに対抗する偉大な精神を辛棒できない。けれどもそれより如何に多くの耐へ得ない小心者クライリヒカイトが多いことか。過剰のものが抜け出る時の大きな調和力、それに多数者は耐へ得ない。彼等は圧倒するものを好まない。先ず分析しその破片を鑑賞する。ゴシックのカテドラルの莊嚴な調和の秘密は彼等の理解の外にある。「相反し合った二つの力が押し合ひ、寄り合ふ平衡」の静けさ。(其れに矛盾を指摘することこそ愚である)。ミケランジェロがそうであつた。ベートオベンがそれであつた。其処の矛盾に耐へ得るか、耐へ得ないか。耐へ得ない者にとっては畢竟これは一の矛盾に過ぎず、耐へ得る者にとってはこの矛盾の上に立つ調和を会得する。

とも角ロマン・ロランは斯様の存在とその一生を終始した。常にその「眼」をこの崇高な軋轢から出る火花で焼きつづけた。その彼自身にまた矛盾があるとしても、これは人間自身のせいである。

音楽技術者は多くロマン・ロランの「音楽説明」を好まない。しかしこれは技術者の通癖である。玄人は玄人じみたやり方を愛する。

私は此处で個人的な印象だけを書くに止めよう。

ロランがピアノの見事な演奏者であることを人は知っている。しかし誰も之をきかない。彼は人にはきかせない。ただ最も親しいものの為に時折演奏する。私は幸福にもこの彼の演奏を彼の家で五度きいた。(或時は彼が選んだ曲。或時は私が注文した)。

私はまたフランスで世間にきこえたピアノの演奏家の演奏にききなれている。私はそれらに感心し賞賛する。しかもロランの「音楽説明」を文学的として認めようとし^ない彼等の方が何と曲目を解釈し、それを指のうまさ^で玉のようにころがり出さしていることか。彼等の演奏は「陶醉」させる。

ピアノを弾く時のロランを見られるが好い。彼は「魔につかれ」ている。負傷して曲がった高い背を尚曲げ、海のように碧い眼がまるで虚無の中をさまようやうに、一つの中心をみつめているやうに、或は放心されたやうに動き、さうして呼吸は短く切れて幾メートルを離れてそのはげしい息がきこえる。彼の大きな手の指は少しも軽快でなくむしろ不器用にふるえながら動く。さうして音の追ひ方の何といふ^しゃれ^れ気のない、正しく楽譜通りの地道な弾き方。しかもそこには生きた世界が現れきる。

私には殊にベートオベンを忽忽弾いてくれた。さうしてこのやうにベートオベン^の精神にちかに包まれたのを私は外にしらない。私は弾いている彼の横に数歩離れて立っていたり、横後にじっと坐っていたりして聴いた。彼の許にいた前後約二十五日間の間、夕食を彼等と共に終って、彼が体の調子がよく気分の好い時は(彼は非常に神経質で怒りっぽい)私に黙って合図して、二階の書齋へ昇って行った。私はそっと彼の後を追った。さうして書齋に彼と二人きり。(彼はよほど機嫌が好い時でなければ、「何が聴きたい？」とは訊かなかった)。彼が「魔^{デモン}につかわれている」ように、私もまたデモンにつかわれていた。かうして三十一番や百十番を、また十番代のいくつかをきいた。

或日の夕食の後、私独り彼の家の階下の客間で何か書物を読んでいた。彼

は書齋に昇り、秘書マリー夫人と一緒に何か話しながら時々断片を弾いていた。すると不意に「ワルドシュタイン曲」がはじめから弾かれ出した。家全体が音につつまれ、音律と共に振動するかのやうだった。私は思わず階段をかけ上って、書齋の戸の外で、自分の体をもまたふるわせながらこれを聴いていた。

ガンヂが彼と別れる最後の夕方、ガンヂが何時もする印度式黙祷が終った時ロランに、「貴方はピアノの名人とされています。お別れの記念に私にきかせていただきたい」と云った。その席（ロランの家の客間でこの黙祷が行われていた）には物好きか崇拜か、ガンヂに会ひたい婦人達が二三十人も集っていた。ロランがガンヂに向って承諾すると、この婦人達は一斉に動揺した。有名なピアノをこの時自分達もきけると思ったのであらう。ロランが書齋へ上がるべくガンヂとその息子、弟子である英国人スレード女史を連れて階段を昇りかけると、これらの婦人達も我先にどやどやとついて行こうとした。階段の途中で立止ってロランは怒った。

「貴方達は来るんじゃない！」

私も女達の無神経と凶々しさに腹を立てた。さうして自分もまた二階へは上らないでいた。するとマリー夫人が来て私に耳打ちした。

「ロランがあなたに来いって…」私はそうっと二階へ行った。

ロランはその夜リストが編曲したベートオベンの「第五交響曲」とグルックの「オルフォイス」の舞曲を弾いた。ガンヂやその息子は甚だ無感覚な顔できいていた。英国人であるスレード女史は眼をつむって笑顔をしながら律につれて頭をふっていた。私は部屋の角からロランの曲がった背と、ふるへる手を見つめていた。

曲が終ると、ロランはガンヂのところへ行き、微笑して云った。

「ガンヂさん。音楽は魂の独白です…」

ガンヂは黙って頭をこくり、こくりと二度さげてうなづいた。

（私はこの稿を読者が理解されるか否かを考へないで書いた。これはロラ

ンの紹介には何等役立たない。ただ彼を考へている人にのみ私は私の彼に対する気持ちを伝える。)

一九三六・八・一九　　巴里にて